

三浦新七先生『文明史特別講義』於商大第二十六番教室

増田四郎教授講義受講ノート by Nakaji

## 目次

第一回	昭和九年一月二十九日
第二回	同年 一月 三十日
第三回	同年 二月 一日
第四回	同年 二月 二日
第五回	同年 二月 五日
第六回	同年 二月 六日
第七回	同年 二月 八日
第八回	同年 二月 九日

### 第一回 . 昭和九年一月二十九日

Objektiv[客観的]な講義をする所で personal な自分の学問の経歴を話すことは不適當と思うが、それを少し述べないと自分の歴史に対する態度が明らかにならないから雑談としてそれを申して置きたい。昔のことであるが自分が高商の留学生として独逸[ドイツ]に行った時の目的は商業政策をやることであった。そう申すと自分の学問的良心を疑われるかも知れないが、その当時は至極真面目にそう考えていた。当時は自分もまだ二十五・六才であって若かったが、その当時の空気が今とは大分異なってもいた。今の大学に当たるのは当時の専攻部であったが、専攻部の同窓生と言うのは皆漢学などをやった連中で、治國平天下と言うような空漠たる事ばかり話していた時代である。時は丁度日清戦争後であって我々は日本の世界に於ける地位等と言う様なことを論じていた。今でも支那国土の觀がある根岸君等はその好例であって、地図を描いては[支那]四百余州の経緯を論ずると言う風があった。かかるわけでこうした空気の中で育ったのであるから学問をすることは全く治國平天下と言う practical な目的を出ていなかったから、自分が商業政策をやるうと思ったことも頷かれるだろうと思う。即ち学問のための学問と言う如きことは、當時も、又今もなお、考えていない。歴史をやると言っても何処までも実用を離れ得ないのも、又我々が過渡期の歴史家だと言われるのもそこに由来するのである。

当時はそろそろドイツの歴史派経済学の説が日本にも入って来た頃であって、自分等は天野為之先生に Mill の講義を聞き、山崎寛次郎先生がその各論をやらせ、又今どうして居られるかは知らないが、久保と言う先生が Bücher 教授の Entstehung der Volkswirtschaft [国民経済の成立]を読んでくれた。それが我々の歴史的興味をそそったわけであった。自分が商業政策をやるうとした時も初めて読んだのは List であって Adam Smith ではなかった。故に政策をやるにしても歴史をやらねばと言うことが頭へ染み込んだ訳である。又横井先生から教えられた日本史のことも Bücher の段階説に当てはめて喜んでいたと言う次第である。

自分がドイツへ行った 1903 年頃の Leipzig 大学と言うのはドイツでも歴史発展と言うことで色づけられていた大学であった。そこで Bücher 教授が Entwicklungsstufe [発展段階]を論じた。心理学の Wundt がやはり民族心理学に発展があると論じていた。又地理学の Ratzel という先生は Völkerkunde [民俗学]の方で縦に発展を見る代わりに横に発展を見るということをやっていた。又、当時はこのことに関する論争の最中で

あって、自分の就いた Lamprecht 教授も政治史の方の歴史家を向うにまわして盛んに論戦していた頃であったから、そこで自分も歴史に対する興味が強められてしまったわけである。

Lamprecht 教授の Seminar で西洋殊にドイツの歴史を、又引き続きドイツ史と日本史との比較と言うようなことをやっていたのであるが、これは Lamprecht 教授が見つけた発展段階説は各国に gelten [通用]するだろうと言う考えが主となって働いていたわけである。即ち国民文化の間には皆異なった Type があると言う如きことは殆んど考えて居なかった。又考えついても、それを wesentlich [重要]なものとは考えていなかった。現に Lamprecht 先生等も各国の特色を見つけて来られた時は自分は寧ろそれに不賛成であった。

初めの中はこうして経済政治組織と言う如き荒っぽい事をやっていたので発展段階説で無理にでも押通して行けたのである。ところが Lamprecht が得意の芸術の方をやられることになるやると発展段階説では説明のつかぬ場合が起こって来た。例えば徳川時代の経済などは Renaissance-Reformation の時代のやり方であるが、芸術の方では遥かに近世の Impressionismus [印象派]の特色を出している。これを如何に説明するか？ 又発展段階説によると国民の発展は一足飛びにはゆかぬと言うが、15・6世紀の徳川時代から明治の新しい文化へ如何にして、又何故に行けたのか？ それは単なるヨーロッパの模倣であったろうか？ その根拠は果たして何処にあるか？ 又発展段階説に於いては一国民の文化発展は各個人の発展と同じである。即ち Geogenetische Prinzip [地域共通原則]ということと言うが、この点から子供の絵を研究した専門家によって成程各国共 Vorstellungsbilder [構想]で大体同じようではあるが、そこにも各国の特色(リズム)が出て来ると言うことが強く主張された。そんなことで自分の頭の中でも発展段階説がぐらついて来た。この状態で自分は日本へ帰って来たが、帰って来てみると講義の準備などに追われて暫くはこの発展段階説でやり通したわけである。

さて、欧羅巴[ヨーロッパ]の歴史をやるとなるとどうしても基督教[キリスト教]ことをやらねばならぬ。すると又どうしても Hellenismus の文化をやらねばならぬ。希臘[ギリシャ] 猶太[ユダヤ] 波斯[ペルシャ]等をやらねばならぬこととなる。ここに於いて Leipzig から持ち来た疑問が益々強くなって来た。この頃欧州大戦が起こったのであるが、この大戦を以て Kulturkampf [文化戦争]であると言うことが唱えられ、固有文化と言うことが主張せられてそうした研究が出て来た。Wundt 先生さえもドイツ哲学の特色を述べ出した。かかる事情からして自分も各国の特殊文化に注意するようになったわけである。Entwicklungsstufe と並んで Kulturtypen [文化類型]乃至は国民性をやらねばならぬと思いつき、今日に及んでいるわけである。即ち List より始まり段々複雑になって各国の特殊文化をやることとなったのである。

以上の如き経歴からして自分のやっている歴史はどこまでも pragmatisch (実用的)の目的を持った、我々の生活のために歴史を研究するという態度であって、自分は基督教のことをやったがキリスト教徒とならなかったために objektiv な Wert [客観的な価値]又は真理が我々の生活を離れて存在すると言う信仰はどうしても持ち得ない。即ち我々の生活の上に於いて gelten [通用]するものだけを見つけるのである。尤も pragmatisch と言っても objektiv に gelten するのは勿論であるが、どこまでも虚心平旦に歴史的

事実を観て行く。即ち三浦なら三浦と言う personal な観方のみでよいと言うのでは決してないのである。即ち真理と言うのは人間にとっての真理であってどこまでも Ego 中心、自分中心の真理であって、ドイツ人の如き自分を離れた所に objektiv な Wert があるとは思えない。

もう一つ断って置かねばならぬことは、今言ったように自分の研究の動機が社会学的であるから、多くの歴史家の如くに個々の現象に対する喜びから始めたのではないということである。個々のものへの喜びは歴史をやっている間に味わった所の喜びであって、それが出発点ではない。故に個々のものをやる時にも typical とでも言おうか、つまり全体に引掛けて喜ぶ乃至は観るのである。そこが大分邪道に入っている歴史である。それでどうも理屈っぽくなる傾向がある。その点を心得ていただきたい。

以上の如き経過であるから、今回の歴史も東洋と西洋の文化の比較をやらねば承知しないのである。これは自分でも出来ないながらも、兎に角やってみるわけである。これは今年と来学年と連続してやって見たい。

問題は大きい、その中で主として重大な意味を持っている団体意識を中心として各国を比較して見たいと思う。

そこで東洋と西洋の文化の比較となるが、極く大雑把に言うとヨーロッパ文化では、一方では権利の意識と他方では組合意識が強いということである。ヨーロッパ人は自分と社会を考える時、自分には常に何人も侵すことの出来ぬ権利がある、自分をどこまでも発展させることは自分に対する義務であるという意識が強い。それと同時に他方又、集団の力なくしては何も出来ない、つまり一緒になって働いて初めて団体の仕事が出来ると言う Demokratisch [ 民主的 ] な意識が盛んなわけであって、つまり集団生活に参加すると言うのが日本などと著しく違う点である。

集団生活の内部関係に於いても、集団と個人との関係からどう見るかは同じヨーロッパでも英・佛・独 皆違うらしい。英国人は社会は個人の目的のために成立すると見るのであるが、佛蘭西 [ フランス ] 人は国家社会を重視して個人を団体の手段とするという傾向がある。ドイツ人は丁度その中間に立って各個人は全体の利益を考えながら、又一方自己の権利を主張する、故に全体は個人の生活から離れて存在しないと考えているらしいのであって、かかる相違から各国とも国家組織、社会理想に対する異なった型が表われて来るわけである。例えば、英国の Gildsocialismus [ 組合社会主義 ] フランスの Syndicalismus [ サンディカリズム・産業主義 ] ドイツの Nationalsozialismus [ 国家社会主義 ] 等がその一つの表われである。

翻って、日本の維新以前の思想を見るに、支那・印度 [ インド ] の影響の為か権利義務 ( Pluralismus ) の思想が軽んじられているのである。西洋人は自分のものは自分のものと主張するが、東洋人は所有権の如きも天が我々の利益の為に与えられたものと言う如き思想である。これは民衆が集まって裁判をしようという如き権利が東洋では全然王の権利に吸収せられたと言うこと、又西洋では Church という制度があつて国家に対して個人を保護したと言う制度があるが、これが日本や東洋にはない点に於いても窺われる。支那の古い時代に墨子の如きは個性の発展を述べてはいるが、それも個性を活かすとは考えぬのであって寧ろ銘々がその個性を活かすことを抑えなければならぬと説くのである。「聖人出で [ 天下治まる ] と」。即ち宇宙の大法によって定められているのが我々の権利であると言う

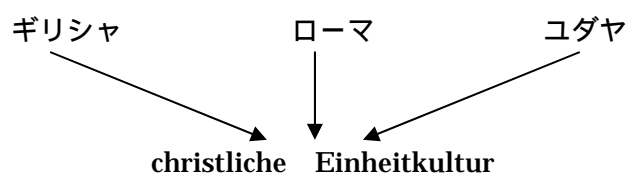
のであって生まれてから自由だと言う権利がない。これと今一つ裁判制度であるが、支那の古い時にはこれはあったのであるが前秦頃その権利が王権の拡大と共にそれに吸収せられて役人の権利となった。つまり、国王が個人を支配すると言う Alexander 大王以後ヨーロッパに起こった如き考えが起こって来たのであって個人は全く国王の支配下に立つこととなるわけである。従って人民を代表する国会の如きがある筈がない。国王が人民の意見を聞くと言うことは、人民が言うから聞くのではなく、天の理に合する、つまり Vernunftig [合理的] であるから聞いてやると言うのみである。故に Demokratie の精神は東洋には乏しい。同じく支那では City の制が発展していない。ヨーロッパでは City と言うとそこに住んでいる者の団体、つまり Citizen の団体が City であると考えるのであるが、支那では同じような事情 - - - 外敵に対する Burg [要塞] としての必要 - - - にあり乍らこれがない。つまり文化の色合いが大いに異なる。

かかる本来日本と異なった思想が維新以来日本に入っている。然るにヨーロッパの中でも英・佛・独 皆異なるのであるが、日本ではその長を採って短を捨てると言うわけでこれらを全て折衷して持って来た。つまり全く機械的な折衷主義による輸入であったと言わねばならぬ。

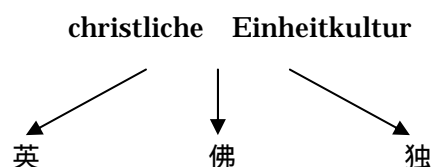
こんな訳で日本に入った思想・制度には自ずから矛盾が含まれているのは当然であって、泰平の時は気がつかないが、何か起こって来ると、英国主義、フランス主義、ドイツ主義の矛盾が解って来るわけである。それが今日、日本でヨーロッパ思想が信用を失った理由であって、国粹主義が起こったわけである。日本固有の思想、それと今まで折衷的に日本で採用したヨーロッパ思想とを比較して、直ちに日本とヨーロッパとの差であると考えて来たのであって、ヨーロッパは物質的である、日本は精神的であると言っている如き状態である。かかる状態にあるから、その中に立って自分の守るべき立場を定め、そこから新文化を建てんと努めるためには、先ずヨーロッパ文化を研究しなければならぬ。

ヨーロッパ文化は日本、支那に比し一層複雑した歴史的産物である。

ちょっと見てもキリスト教があって、しかもそれは古代の諸文化 - - ギリシャ、エジプト、ユダヤ、ローマ等 - - - がローマ末期に結びついて出来上がったものである。かかる複雑なるものが Germanen [ゲルマン人] に伝わったのであって、その際に又 Germanen 固有の Element が入ったわけである。かくして凡そ十三世紀までに christliche Einheitkultur [キリスト教的統一文化] が成立して Kirche [教会] が支配することとなったが、これは十三世紀のヨーロッパ人が自分で作った Kultur [文化] ではなく寧ろ遺産であった。故に当時の人の生活それ自身の間から統一的な文化が出たのではない。それは丁度大化改新に際して唐の制度を取り入れ、明治維新に際しヨーロッパを取り入れたと同様に、その当時の人の生活と時代の文化とは巧く合致していない。従って当時の実際の文化はキリスト教に関係しないとでも言おうか、つまりその当時の人の生活をキリスト教が抑えているために einheitlich [統一的] に見えるだけであって、それはどこまでも遺産たるに過ぎない。



故に社会を支配する理想と実際とが合致しないのである、ただ外形に於ける統一文化があるかの如く見えたのみである。故に十三世紀以後に於いて諸国民の文化が進んで来て各国民の文化が出て来るわけとなるとキリスト教文化は当然瓦解しなければならぬ運命にあった。それが即ち Renaissance-Reformation [ルネッサンスー宗教改革] の運動である。つまりキリスト教と言う母によって育てられた子供が一ちょ前 [一丁前] となるに及んで母の理想と合致しないためにこうした Kulturbewegung [文化運動] となったわけである。



キリスト教文化の中には、ギリシャ、ローマ、ユダヤ等の異なった文化が Element として入っているために、こうして母体より分かれる時にこれ等各々のものは、その Elemente のどれかを強調するによって、例えばローマ的傾向のある英国の如きは Roma という Element を強調することによってキリスト教の本義なりと主張することになって来る。又ギリシャ的 Element を強く受入れた例えば Italy の如きもその好例であろう。

かくの如くヨーロッパ諸国が分かれても、尚そこにはキリスト教的文化の意識が強く残っている。そこに Heiden [異教徒] と異なる意識が残ったのみならず、もともとキリスト教の中にひそんだギリシャ、ローマ等の文化があることを意識しているために、各国民は自分の強調する或る Element と他の諸 Element とを何とかして統一しようとする。即ち行詰って来るとこの努力が益々強くなる。これが東洋文化に比しヨーロッパ文化が活動的であり、又そこに Stagnation [沈滞] の状態に入らない所以の存する所であると思う。

かく複雑なヨーロッパ文化の特色を捕らえるためには、どうしてもそれを歴史的分解の方法によってなすのが便利であると思う。つまり Christentum [キリスト教義] の中に含まれる各個の Element の Typen を見つけ、それ等のものをどの点で加特力 [カトリック] が結び合わせ得たか、又それから分かれ出た各国文化が如何にして結びつこうとしているのであるかと言うことを歴史的経過の中に分解するのが最も便宜と思う。つまり歴史的にその経過を describe するに際し、一方各国民の Entwicklungsstufe を見る間に、他方更にそれ等各時代を通じて現れる旋律を catch すると言うことが最も便宜な方法であると思う。それが、言わばこの講義の Thema [テーマ] でもある。

今まで申上げた如く、自分の立場はキリスト教的客観主義を欠くがために、所謂真理と言うことは人間にとっての真理である。つまり与えられたものを見つけるのではなくして我々の生活の中から schöpfen [感得] して行くのである。故に最後の落ち着きは自分の体験となるわけである。即ち言わば心理的となる。西洋の歴史家否寧ろキリスト教徒的歴史家は歴史は神の Plan に従って発生するのであるから、かかる人間以外の立場から与えられたものを人間が出来るだけ見つけると言う如き態度であるが、我々はかかる態度はとれない。つまり歴史的事実を観ている間に我々が価値ありと思うものを見つける、又は新たな Wert [価値] を作り出すと言うためには仮に自ずから発展段階と言う如きものを基

礎とするのみである。即ち新しき Wert を見つけて、それを作り上げるようにするに際しての単なる条件をこれに見つけようとするのである。かかる立場からしては自らを心理主義にならざるを得ないのであって、自分としてはこの立場からキリスト教文化の中に含む諸文化を、この心理主義的立場より分解するという仕事をやらねばならぬ。

我々には一度経験した事実は他に反対の事実のない限り二度三度と引続き同じであることを期待する傾きがある。例えば、一度来た時に“国立”[くにたち]が天気が良いと、“国立”と言う所はいつも天気の良いものとして印象を受ける傾向がある。この傾向から我々に実在と言う如き考えが出てくる。兎に角かかる心理的傾向として我々は「目で見たものは心之を信ずる」(ドイツの格言)のである。その場合、人により又国民によりその目を以て見るものが違う、見る能力が違う。個人では Goethe [ゲーテ] 国民ではギリシャ人の如きは何か一部分を見るとその底にひそむ本体を見得る能力を持っている。兎に角その本体が心眼に映るのである。目で見るものはその本体の Erscheinung [出現]であると見るわけであって、かかる Type の人を Nietzsche [ニーチェ] はアポロン型の人と言っているが、自分はこれを Theoretisch [理論的] 型の人と言う。これに反して、個人ではビスマルク、国民ではローマ人の如きを Nietzsche の所謂ディオニソス的、自分はこれを Praktisch [実行的] な型の人と言うのであるが、かかる型の人には全ての事物が個々別々に存するのであって、一つの事実を他と比較してその共通の本体を見破る能力が無い。

この二つの型が何故にあるかは我々には解らない。しかし、個々のものを実在と見る心理的傾向を考えて見ると、この Praktisch な人々は外界の事物を見る場合にその一つの具体物から発散する刺激を強く受けるのであって、これと同じような他のものと比較するの余裕を持たないと言う型の人である。支那、エジプトの如き象形文字を有する国民がこの傾向が強いと言える。林、とか 暮 とか言う字が出来てくる訳がそこにある。これ等の傾向ある人々の頭の中では個々の受けた印象の中に連絡が存しない、あっても極めて弱い。即ち他を見た時に Assoziation [観念連合] に依って結びつけてその本質を見得ない、Pluralistisch [多元論者的] である。これを私が praktisch な傾向の人と呼ぶ所以は、少なくともこの理由は物を見る時の心持ちにより異なるのである。同じ能力の人でも与えられた事物を利用し、これを支配征服せんと言う如き行き詰まった気持の時と、またこれを外側から beobachten [観察] する場合とは全く異なるわけである。前の場合にはどうしても個体に注意が集中するわけであって assoziation などをする余裕がない。之に反して、beobachten 又は bewundern [賛嘆] する人の場合には物と自分との間に距離があるのであって、そこに Assoziation 又は Imagination が行える訳で、そこから Theoretisch なものが出て来る訳である。こういう人の素質が調和的に発展している場合に於いては、自分の中に表われて来るものが皆自分が [に?] 働いてそういう印象を受ける、つまり自分の表われであると考えの人がある。Goethe などはその好例であると言える。このようなことが出来る人であれば外界の事物も皆その底にひそむ自然、外界の本体を認めることが出来ると思う。

上述のことが認められるとするならば、地理的・国際的・社会的関係という如き点に於いて比較的楽な生活をなし得たギリシャ人就中その貴族、又自然的条件に恵まれていたインド人の如きが、所謂 Theoretisch な傾向ある文化を作り得たわけであって、インド人の如きは余りに楽な生活が出来たため却って pessimistisch [悲観的] な傾向さえも帯び

得たのであったと言わねばならない。

これに反し、ユダヤ人の如き、アラビアの砂漠に飄伯し、天恵極めて薄きパレスチナをさえ“乳と蜜を以て満たされたる楽園”なりとして其処に定住したユダヤ人、また国際的には常に大国の間にはさまれて苦しみを受けざるを得なかったユダヤ人、或いは又 Tiber [チベール] 河辺に同力の諸多の部族の間に介在して自らの地位を占め、やがては大国民となり得たローマ人の如きは所謂 **Praktisch** な傾向ある文化を産んだものと言い得るわけである。かかる **Theoretisch** と **Praktisch** の分け方と互いに **kreuzen** [交叉] する、乃至は対立する考え方がある。それは **Objektivismus** [主観主義] と **Subjektivismus** [客観主義] の対立であって言わば、次ぎの如き形ともなる。

**Theoretisch**                      **Praktisch**

**Objektivismus**

**Subjektivismus**

個人でも国民でも文化がすすんで一丁前になる時には自己と言うことの意識が発生する。自己が不可分の単位であり、全行為の主体であり、全行為の責任を負う。それに対して **Nicht-Ich** [自分の外にあるもの] とでも言おうか、兎に角社会・国家というものが意識される。この時自分と他のものとの関係を考える、その考え方に **subjektiv** なのと **objektiv** なのとがあるわけである。

つまり自分が **aktiv** [積極的] に、征服的に進むが如きが **subjektiv** であって、これに反して自己を無くして他の外界に服し、そこに安心立命の境地を得んとするものがある。これが **objektiv** であって、この相違がローマ人とユダヤ人との対立的な差であると思う。即ち極く大雑把に言えば、ローマ人は **subjektiv** であるに反しユダヤ人は **objektiv** である。これは又男性的と女性的と言ってもよい。ローマ人はどんなことが起こっても自分で支配する。ローマ人にあっては、知識の如きも外界を支配する手段であると考え。又自分と同力の如き強敵が生ずればそれと妥協して事を処理する。これに反し、ユダヤ人は、ローマ人の如く自分の力に対する自信がない。故に **aktiv** に出る代わりに自分より大なるものに服従してそこに安心の立場を求めた。つまり、神工ホバというが如き全智全能の神を信じこれに服したのであって **Objektivismus** の著しい一例であると言わねばならぬ。かかる観方より一つの **Schema** [図式] を作って見ると次の如くなる。

**Theoretisch**

**Praktisch**

**Objektivismus**

**Inder** [インド人]

**Juden** [ユダヤ人]

**Subjektivismus**

**Griechen** [ギリシャ人]

**Romer** [ローマ人]

尤も **Inder** と **Juden** との間には **Perser** [ペルシャ人] 等が入ると言う風の色々複雑ではあるが、**Schema** としてはこんなことが言われ得るかも知れないと思う。東洋文化殊には日本に入った文化は、**Inder** とそれから **Romer** に近い支那人との結合であるとも言われるかと思うが、これは未だはっきりとは言われない。かかる点より先ずヨーロッパについて述べて見よう。

( 第一回 終 )      2001 . 1.13 WP end 中路

## 第二回． 昭和九年一月三十日

今日からは昨日の Schema [ 図式 ] に従いキリスト教の中に含まれる古代の諸文化について話を進めることとする。先ずは初めに Subjektiv-Theoretisch なギリシャをやるつもりだ。

ギリシャのことをやる場合には当然ギリシャの歴史をやらねばならぬ。今日ギリシャ・ローマを以て古代、次に中世、近世、最近世と言うのは十八世紀頃から行われた時代分けであってヨーロッパを全体として見んとする企ての表れである。しかし我々はこれには従えない。ギリシャにもローマにも等しく 上世、中世、近世、最近世 があるのであって、これ等を通じて如何なる旋律、特色が出ているかを見なければならぬ。しかしギリシャについて今ここでこれを行うことは非常に時間がかかることであるから、これに関しては『商学研究』に何時か書いて置いたもの [ 注 ) 岩波書店『東西文明史論考』所載第四論文 ] に譲ることとして、その結果得たものを少しく述べたい。

ギリシャの団体意識を観るとその地理的、国際的等の影響に依ってその特色が窺われる。第一はギリシャにあってはその Citizen が支配階級であったということである。ギリシャの諸国はその本国に於いても又小亜細亜 [ 小アジア ] に於ける植民地に於いても皆等しく征服、Eroberung によって出来た国である。紀元前 1,500 年頃テッサリアの地方からギリシャの諸民族が南下した時には、その移住先には全て他の先住民がいたのであって、これを征服して彼等は自らの国を建てた。又紀元前 1,300 年から 1,000 年頃に於ける第二回のドーリアン人の移住によって、それ以前に住んでいた民族はこれに圧倒せられて他のわき [ 傍 ] の地へ行くか又は奴隷となったのである。故に彼等の移住はどこまでも征服に因るものであって、征服せられたる民を奴隷或いは Heloten と称する農奴階級に引き下して、農業その他の生業に従わせ、征服者はこれ等より上がる生活資料によって生活したのであった。故に、ギリシャ国民 [ ポリス市民 ] は大体に於いて貴族階級・武士階級であって、市民たる者は所謂養われる階級 [ でありながら ] 治める階級であると考えられた。この故、市民の主たる仕事は生業ではなくして戦争・政治・競技 (Sports) 等の如き所謂 public affairs であった。従って家族生活殊に経済生活が比較的軽んじられ、生産を事とする階級の如きは肉体に於いても精神に於いても一段劣った者であって、共に国事を談ずるに足らずと言う風に見られた。これ等のことがギリシャ美術の粋が今日神殿その他の公的な建物にのみ集中して残され、私人の家屋がこれ等に比してみすばらしかった所以であり、又奴隷制度が国家を維持する物質的基礎であったが為に、後になって哲学者輩出して人間平等を唱えても、この制度だけはこれを廃止せんとするの努力が出ていない所以である。要するにかかる貴族たる Citizen [ 市民 ] によって Athens [ アテネ ] Sparta [ スパルタ ] と言う如き国が出来ているのであって、農奴その他は公事には預かり知らぬと言うのがギリシャの一つの特色である。

第二の特色は小国分立と言うことである。と言うのはギリシャの諸国にあっては国王の制度が早くよりその発達の芽を止められていて余り発達していない。即ちこの土地の地理的自然的事情よりして山多く小国が互いに分立するの便利であったと同時に、ペルシャ戦争以前に於いてはその近隣に敵対すべき大国が無い。のみならず、エジプト、支那等の如く、黄河とかナイル河等の如き戦うべき大きな自然も存しない。従って大戦並びに大治水工事等により、その衝に当たって国王が自らの大権力を拡大すべき必要がない。そのため



国王は常に孤独であった。間もなく国王は Citizen の選出した役人によりその地位を狭められ、Sparta の如くに国王は単にその空位を守るか、Athens の如くに全く Citizen によって代わられるに至った。従って国王を中心とする 大夫・士・庶民 の如き社会階級の成立する余地がなく、Citizen 全部が等しく国務に参加すると言うわけになって来た。斯くの如き事情からギリシャ民族は文化的には合して一団となり自分達のみがギリシャ民族であると言う所謂 Barbaren [蛮族] に対する意識は既に紀元前 8 世紀頃に出ても、政治的には打って一丸とせる如き National-Staat [国民国家] は実現しなかったわけである。同様に紀元前七世紀の百年を通じて盛んに行われたギリシャ諸国の植民もその意味が近世ヨーロッパの植民とは異なり、市民の一部が母国から分離して新たな City を建てると言うのみであつて、母国領土の拡張ではなく、言わば本家、別家の関係にあるに過ぎない。即ちその各々が独立せる政治的主体をなすものであつて本店、支店の関係ではない。かかる理由からギリシャの City はその包含する市民の数も少なく一万乃至二万が通例であつて、その領域も亦小さい。新たに植民によって City を建設する時にも先ず一万位を normal な市民数となしていた。これ等の中の最大国たる Sparta に於いてさえ、その最盛期たる紀元前五世紀の頃、領域は 525 平方里であつて武蔵国一國よりも少し小さいのである。しかもその中の三分の二以上は Perioken (付傭国) と称する所領であつて、Sparta の本領は僅かに 120 平方里、その中に約一万の Citizen と十七・八万の従属民 Heloten とが分かれて住んでいると考えて良いわけである。

また、Athens を中心とする Attika の地は Sparta よりも更に小さい。しかし Perioken 少なく、その最盛なりし紀元前五世紀の頃に Citizen 十万、奴隷十万、その外に客民とも称すべき Metioken 約二・三万が住んでいた。Attika の地は僅かに 160 平方里、我が国の山城一國程の大きさである。こんなわけであるからギリシャの City を考える場合には我が維新前の藩を考えるか、又は今日の瑞西[スイス]の州を考えればよい。かく Citizen の数が少なかったからこそ、皆が籤により“代わり番こ”に役人になり得たわけであり、又後に述べる文化国家の理想が出現した理由もここにあると言わねばならぬ。

かかる国が段々時代を経るに従い国家の理想が出て来たのであつて、後に出た哲学者 Plato [プラトン] でも Aristoteles [アリストテレス] でも皆等しくこの小国分立を前提としてその国家学説を打立てたのである。かくしてギリシャ人は一目で見渡し得る如き国を持ち、一人の伝令官(ヘロルド)の声が集合せる全市民に徹底し得る如き国を考えた。つまり Citizen や国がありありと目の前に plastic に見得ると言う要求を有する傾向をもっているわけで、これがギリシャ人が目の国民であり、造形美術的・彫塑的(plastic)なる国民であると言う所以である。そのためペルシャ戦争の際に、ペルシャと言う大敵を控えて、自らは大国家を形成してこれに当たらぬ如き時にも、合併を行わずして単に小国家の連合、所謂 Gruppenplastik [集合体] を作つてこれに当たつたわけである。この関係は Sparta がその Perioken を支配したのと全く同じである。従つて植民地が多くなると言うこともその支配する Gebiet [領地] が拡大すると言うには非らずして別個に独立せる団体が多くなる、つまり Sparta なら Sparta に従属する団体が多くなると言うことである。

全てギリシャ人にとって「大いさ」と言うのは一つ一つの Block が集まって大いさを成すと考えるわけであつて、尤もギリシャ末期に「無限」と言う考えが出て来てはいるが、

それは具体的に見えるものを無数に集めた結果見通しがつかなくなったことを意味するものであって、今日ヨーロッパ人の有する無限の観念とはおよそ異なったものである。よく言われる話であるが、ギリシャ人に於ける無限とは世界の果で槍を投げて、それが止まった所へ行き更に又その槍を投げる、かくしてその止まる所を知らずと言う如き無限観である。かの Alexander 大王の征服[目的]も世界の果てまで征服するにあつたが、彼がインダス河まで来て更に遥かに拡がっている限りなき地を見た時には涙を流したと言う話さえある。

以上の如き特色と相並んで第三には、その政体が Democratic であつて、その国家は所謂 City-State (都市国家)である。つまり王権盛んとならず、小国分立する結果 Democratic となり、Citizen 全部が國務に参与することとなる。又自由民の間に階級制度が発生しなかつたと言うことと相並んで、戦争に於いても東洋に見られる如き戦車・騎士の制 - - - 尤も小アジアの一地方に一時行われたることもあるが - - - は永くギリシャの制とはならなかつた。けだし、かかる制度はその武装に多額の費用を要し、全ての者が武装し得ないがために、自然、兵農相分かれるの原因をなすのであるが、ギリシャにはこれが無かつたのである。しこうして、ギリシャ兵力の中心をなしたものは Hopliten と称する重装歩兵[注) 鎧、兜、楯、剣で装備]であつて、つまり歩兵の集团的行動が勝敗を決することになっていた故に、その方面からも自由民の間に上下の階級を生ずる余地がない。比較的 aristokratisch [貴族的]と言われる Sparta に於いてさえも、その Citizen の間では Athens に於けると同様平等であつて、彼等は等しく國政に参与し戦争に従事したのである。

かかる Demokratisch な傾向と相並んで Aristokratisch な傾向があるのであつて、それ等 Citizen が少数の指導者により支配せられ、事実上、上下の差が出ている。例えば Sparta の民会を招集する権限は役人にある。そして立法も役人選挙も民会それ自身には発案権がない。ギリシャの立法についてはいずれ後に述べるが、例えば役人が作った案を民会が否決しても、その代案を民会から提出し得ないのである、ただ可否を相談する程度のものであつた。しかも又民会の決議のみを以てしては外国なり国民なりに対して効力を持たぬのであつて、役人がそれを行わねばならぬ。つまり、Citizen は平等であるがそれを指導する者はどこまでも役人であり、市民の中の優秀な者が人民を事実上支配すると言うわけである。國法の如きも神により定まるか、若しくは Athens 國家により定まると考えるのであつて、一時的なる偶然の中に住するその人民により作らるべきではない。従つて民会では法律は出来ない。やむを得ず法律を作る場合には、立法者(Thesmotet)なる者を選び、それが役人・人民の上に立ち、言わば國家を代表する者と言う資格によって定めるのである。Solon の法もまた、かくして出来たものに外ならない。

一方に Demokratisch と同時に他方に不平等なる Aristokratisch な傾向が両立して存すると言う所にギリシャの特色がある。かくの如き二つの傾向が如何にして同時に成立し得るか。それは、ギリシャ人の考えによると各個人の個性は他と異なつた所に価値ありと考へたのではなく、皆各個人には同じような理想、万民共通に仰ぐべき理想としての Humanity[人間性]が存するのであつて、ただ優れた人はそれを“より”多く具体化しているからだと見るからである。つまり、理想が遥か遠方に plastic に描かれ、皆んなそれに向かつて進んでいると見る、そこがギリシャ人が Subjektiv なりと言う所以であ

る。我々の有する defect さえ無くすれば全ての者が理想に到達し得ると考えているから、全ての人が相競ってこれに近づかんと努力するけれども、その競争の目的は共に競う同輩に打勝つことにあるのではなくして、理想に出来るだけ近づかんとするのが目的であるから、若しここに十人なら十人居てその中の一人が理想に“より”近ければ他[の人]はそれに信頼し得るわけである。故に、そこに一緒に働くとする平等主義が行われるわけであり、他方に又なるべく理想に近い人に信頼を置くということから貴族主義表れ、両者は並立し得たものらしい。

しかし、完全なる理想はただ集団生活によってのみ実現し得るものと考えているのであって、各個人が完全なように努めて理想的な人となって、Citizen 相互間に Harmonie[調和]を得て初めて全体は理想国家となり得るわけである。そこが、個人主義と総体主義とが巧みに結合している理由であって、国家と言うのは個人が harmonious に置かれた Constellation [星座]であると見る。ギリシャ建築は個々のものが美しく出来ていて、しかもそれ等が配列せられた順序が全体としても美しいと言う考えから成っている。それと同様に各々が自由に伸びて初めて国家が美しく成立すると見る。これ即ちギリシャでは Tyrant [僭主・専政] 制が常に憎まれた所以である。

かかるわけで理想国家は Citizen 相互がうまく行っている状態であって、国家が上から覆いかぶさって之を支配しているのではない。我々個人に於いても自己と言うものを考える時、それは支配の関係ではなく、全ての感情が各々完全円満に発達し、調和し、それ等を包含する個性とか人格と言うものがあって、各々のものが全て自己の表われであると考えられる時、初めて自己意識が完全になるわけである。つまり、自己の経験より自ら感得すると同様に、Citizen 相互から国家が感得されるものとなるわけである。かくなると、国家と言うものも一つの実体として考えられるわけであるが、その中の harmonious な Constellation だけを抜粋して考えると、国法と言うものが出来て来るわけである。

かかるが故に、ギリシャの国法 Nomos は、丁度言わば我々の心理状態に於いて自己と言うものを考えて行き、その自己の個性と言うものを考えると同じように、つまり国家の性質とも言うべきものがこの Nomos である。後述するユダヤの法律は我々の生活に関係のない力強い神の一方的意志により命令に服して出来たものであるが、ギリシャの国法はこれとその性質大いに異なる。又それはローマの法とも異なるのであって、ローマでは各個の行動の範囲を契約によって定めたのが法律であるが、ギリシャではどこまでも国家の性質の表われであると見るのである。

かかる点よりして、ギリシャの国家は所謂 Kulturstaat(文化国家)と言うものになる。この意味は全ての Citizen が国家の中に吸収せられて国家の干渉はその生活の全方面にまで及ぶ程のものとなる、つまりあらゆる文化が国家に吸収せられると言うか、全方面が国家行為となり、団体生活となるわけである。これに反し、Rechtstaat [法治国家] と言うのは法律に関する方面のみが国家生活をなすのであって、それ以外は全く個人の自由であるところの所謂 Liberalismus [自由主義] の思想である。ギリシャの場合の如きに於いては、国に法ありてしかる後に権利がある。国法によりて我々各個人に与えられたる活動の範囲即ち権利であるから、“法存して後、権利あり”と見られるのである。之に反し Rechtstaat [法治国家] に於いては、個人は生まれながらにして権利あり、しかる後に国法があると言う考えである。

以上が大体ギリシャ国家の特色であって、かかる立場よりギリシャ団体生活の Type を観ると次の様な絵が出て来る。

山城一國位の地域の中に City が築かれ、それが経済上・政治上の中心であって、その他は皆その付属物 [ 国 ? ] であり、この City の中に一万乃至二万の Citizen が住み、それが国家の本体をなしている。Citizen は役人を選び、全て平等に国政に *Mitarbeiten* [ 協働 ] している。その団体生活の中に *Harmonie* が存するところから、その調和の蔭に国家とすることが認められ、個人の行動を国家から仮に切り離して考えると *Nomos* という考えが発生すると言うわけである。かかる Type は我々がギリシャの政治史の間から作り上げた Type なのであるが、これは我々が勝手に作ったものではなくして *Objektiv* なものであると言うことを証拠立てるために、ギリシャ人自身が国家・国法を如何に考えたかを究めて見ると、そのことが了解出来ると思う。

紀元前七百年、それは丁度 *Sparta* では貴族的市民の共和政体が成立した時代であるが、*Athens* では同様にやはり貴族が国王の権限を制限して少数貴族が政治をとり *Republik* [ 共和制 ] となった時であるが、この頃 *Athens* の北 *Boetia* [ ボエチア ] の地方に *Hesiod* [ ヘシオッド ] なる歌人が現れるが、その歌の中に、法律並びに *Justice* の神として *Themis* と *Dike* なる二神が表われる。*Themis* は本来神の *Orakel* ( 宣託 ) を具体化する女神であって、つまり *objektiv* な法規を具体化する守り本尊である。*Dike* の方は強者に対し弱者の権利を保護する女神であって、これは *subjektiv Recht* つまり権利を具体化するものである。ところが、*Dike* 神は他人の不法行為により蹂躪されたる時も、これに反抗し復讐する力を持たないのであって、ただ自分の権利が侵されると *Zeus* の所へ行って他人の不法を訴えるか、又はその権利を侵された人の所へ行って慰めるのみであって、反抗には常に *Zeus* が出ねばならぬ。これ即ち *Dike* の権利は自分で自分を保護するのではなく僅かに主権者に頼るものと考えたことが解る。*Hesiod* は多少文化の遅れた所の百姓の家に育った人であって家族主義の強い人であったから、*Dike* は個人のために個人の権利を保護すると言うよりは、全体のために個人の権利を保護すると言う風に考えられている。そこに権利は法規に従って与えられたるものなりとの意識が出ていたのであって、*Dike* は力の神なる *Zeus* と、法律を代表する *Themis* との間に生まれた子供であるとなっている。

この *Hesiod* から約百年を経て紀元前六百年頃に出た *Athens* の立法者 *Solon* [ ソロン ] の時代になると、その詩の中では既に *Hesiod* の如き *Mythologie* [ 神話 ] が無くなり、*Dike* は弱者が要求する平等、つまり正義と言う概念に変わっている。強者とはこの正義即ち社会の平等を破ることによってその地位を得たものなりとの思想が強く表わしているが、*Solon* の言う平等とは *mechanical* な平等ではなく各人正当なる地位に置かれ、分け前を国家から得て、しかも *harmonious* になることである。彼の歌に「正義は粗暴を和らげ、過度に節制を与え、これによって悪業の跡を断つ」と。つまり中庸調和こそ平等であり理想であるとするわけである。彼のなした国法制度はかかる立場から *Athens* 全体のために各階級に正当なる地位を与えた改革であった。*Citizen* 全体の力によって弱者を圧する強者を抑えることこそ *Dike* 即ち正義であると言う考えである。故に *Dike* は *City* 全体の共同意志として調和を与えると同時に、市民の上に立って命令する役人が *degenerte* [ 退歩 ] した *Tyrant* に対し、市民を保護するのが *Dike* で

ある、しこうしてかくの如く市民と役人との間の“取り決め”を定めたものが即ち法律（Thesmos）である。

Thesmos なる語は Victor Ehrenberg の “Die altgriechische Rechtsidee [古代ギリシャの法律理念]”によると「物を建てる」又は「建てられたもの」の義で裁判官がその任期中守るべき標準として認めたる規範を木の立札に書き、これをその役所に建てたところから法規の義となり、それが代々の裁判官により継続して守られるところから法官を拘束することとなり、一般社会の規範として認められ、そしてこれを編纂したものを Thesmos と呼ばれ後には広く法律の謂となったと言うことであるが、Solon の立法もまた全くこれと同じく positive law であって、そこには何ら宗教的背景を有していない。つまり Solon なら Solon と言う超人的力ある個人が国家の本質を観破って定めた法が、執行力を有するに至ったと言うわけである。

かかる考えから更に、Thesmos が Nomos の意識と一緒に結びつき、そこから Nomos が前述せる如き国法と言う考えになったわけである。Nomos なる語は本来「分ける」「分配する」の謂であって、Hesiod によると「神 Zeus、Nomos を定め給う。獣類互いに相食み人間には正義あり」と言うのであって、Nomos なる語を神によって定められたる自然の秩序なりと考えられているを見る。かくの如く Nomos は或る物がその特質として他と区別せられる所以と言う意味であって、各国の風俗習慣、殊にお祭りの儀式を指すこととせられ、それを Nomos と称せられていた。その Nomos が紀元前七世紀の Solon 以後に於いては段々世俗化し、不文法 [律]、つまりその国の特色と言う風に考えられ、即ち Athens なら Athens には昔から Nomos があり、それに従えば強者が弱者を苦しめるのは不当であると言うところから、この考えは無産階級が貴族階級に反抗するように使われたわけである。

紀元前六世紀中期になると「Citizen はその City を守ると同じように、その Nomos を守らざるべからず」と言う意識が出て来る。つまり Nomos なる語の意味が Thesmos と一緒になり、国家の本質に従って表われたる現行法と言う意味になって来た。故に今まで神に引っ掛かっていた Nomos が今度は Athens なら Athens という国の本質に引っ掛かることとなった。ここに於いて正義の神なる Dike の意味さえも吸収し、その国より流れ出ずる自然的秩序と考えられるようになった。ここにギリシャ人の国家、国法に対する考えが窺われるわけである。

これで大体ギリシャの City の Type を極めて簡単に述べたわけだが、これからは、かかるギリシャの City 生活から、又国法から出て来た事実をその国民性に引っ掛けて考えてみる仕事である。

(第二回 終)

2001.1.17 W.P end 中路

### 第三回． 昭和九年二月一日（第二十八番教室に於いて）

この前の講義で先ずギリシャの国家制度の中からその団体意識を読み出すことをなした。続いて法律意識について話し、それが国家生活の考えと一致すると言うことを見、その団体生活の Type が勝手なものではなく *objektiv* なものであることを述べた。

これからの仕事はこの国家生活の Type を我々の心持ちに還元して見て、如何にしてかかる考え方が出来るかを考えることである。つまり今までの考え方は我々と対立するものとしてギリシャの法律意識を *objektiv* に考えて行ったのであるが、今度はこれを我々の心持ちに引っかけて内側から眺めんとするにある。自分の所謂国民性に引っかけて自らギリシャ人になってみて考えて見るのである。つまりギリシャ文化の特色は、かくして想定されたギリシャ人と言う所から出ているために、そしてそれが各種の文化に表われて行くのであるからして、かかる客観的事実から求めたものが各所に表われる現れ方を見ようと思うわけである。

ギリシャ人と言うものを考えて行くと言う所から、ギリシャ人と言うものが何か *metaphisich* [形而上的] なものであると言われるかも知れぬが、自分に於いては、然らずしてそれは研究の便宜上考えて来たのであって、つまり我々がギリシャ文化 - - 団体生活、宗教生活、芸術生活の各方面について考えて見て、その発展の各階段に於いて如何なるリズム（旋律）が表われるかを見て、それが又共通なる特色が出ていると言うことを見ん為めである。ここに共通と言うは *abstraction* による共通ではなく、全てが一つの *Urtype* から、つまり全ての方面に表われる特色がそこから導出し得ると言う如き意味での共通である。かくして定めた特色を有する *Träger* 乃至は *Subjekt* として《ギリシャ人》というものを想定して見るわけである。従ってこのギリシャ人は一定不変ではなく、自分の研究の進むにつれて変わって行くべきものである。他の言葉で言うと、前に想定したギリシャ[人]の特色が、各方面に表れると言うことを知ることによって、自分の考えを確かめんとする目的である。こうなると各方面の特色が如何にして比較し得るかと言う問題が起こる。例えばギリシャの *Temple* の建築様式の特色、悲劇の特色、国家生活の特色と言う如きものを如何にして比較し得るかと言う問題である。しかし、我々は二重人格者でない限り、三浦なら三浦と言う人間の行為は、如何なることを為してみてもその各々にいかにも“三浦らしいもの”が表れて来る筈であり、又必ず来ると言う直接経験を元[基]としてこれをギリシャ人に *project* して見て、その文化は何処に於いても同じような傾向が出るものと観るのである。

こんな訳であるから、かく定められたる《ギリシャ人》は言わばギリシャ人の生活と考えられた自己の生活である、ギリシャ人と言う客観人の生活と考えたる自己の生活である。これを纏めて行くものが自分自身の力で作り上げるものであるから、従ってそこに言うギリシャ思想とは、昔現実に存したところのギリシャの平均思想でもなければ、それを現実に導いた実際の思想でもない。つまり、我々に残されている諸々の遺跡のあらゆる方面に於ける文化を基礎として、我々の力を以て *reconstruct* して《ギリシャ人》と言うものを作ってみるわけである。こう考えるとギリシャ文化が“より”よく解ると言う意味である。

ギリシャ国民の団体生活をその国民性に引っかけて考えるためには、他の文化の諸方面について細かく研究しなければならない訳であるが、さればと言ってこれを一々詳細に研

究してここで述べる事が出来ない。故に止むなくギリシャ人の宗教生活についてお話しを見て、他はそれと同じ Type を持っていると言うことに置きたい。

ギリシャ [人] の宗教心を窺い得べき手近な材料は、Homer [ホーマー] の詩である。

ギリシャの Epos [叙事詩] が、今日我々に Homer の詩としてまとまったのは紀元前八世紀の頃であって、それ以前の Epos と言うは Dorian 人が第二回移住をなした際に、第一回にやって来ていた部族と戦争した記憶がそれに交じり、Troia [トロヤ] 城の攻撃と言う如き半ば歴史的、半ば伝説的なものが残った。そこで Mycenae [ミケナイ] 文化時代の風俗習慣の記憶が上述の Tradition に、くっ付き、更に Mythologie [神話] がくっ付き、それを我が国で言えば“語部”[かたりべ] とする如き者が暗記して宴会の席上で歌っていたわけである。それが八世紀の半ばに Homer によって纏められ、今日我々に残り伝わったのである。Homer は小アジアの Smyrna の人であるが、その時代の小アジアの文化は Karolinger [中世のカロリング王朝] の騎士文化に当たるものであって、戦争掠奪によってその生活態、活動態を満足せしめていた。故に宗教的熱情が失われ、社会は全くの Convention [因習] として考えられていたわけである。従って Epos の如きも酒宴の際に歌わずもの、つまり日本の平家物語と同じように取扱ってよいものであるが、兎に角この Homer の Epos に表われる宗教的方面、つまり神を如何に考えていたかと言うと、Homer に出て来る Hero が如何にも plastisch [塑型的] であると同様に、そこへ出て来る神々もまた、各々独立した plastic な神であるのを見る。それは、各々血統のつながりはあるが、各自独立せる意志により行動しているのであって、したがって又その力は無限に大きいものでもなければ、所謂 defektlos [完全無欠] でもない。その能力に於いても自ずから人間的であり、制限が存するのである。かくの如き人間よりも少し偉い神々が色々に働き、そしてその相互の力の Balance をもって神の国が Harmonie を得ている。それはつまり、前にも言った Gruppen-Plastik [集合体] という奴であって、しかもその蔭には神以上の何かがあると見るのであり、神 Zeus すらもその何者かの力即ち運命によって支配されているわけである。つまり神の国を統一する力が既に存しては居るが、それが未だ他の神々の意志とおなじような形にはなっていない事情にあると言ってよろしい。

次に宗教の主観的方面、即ち神に対する我々の立場から考えると、前にも述べた如く宗教的熱情がすっかり失われているのであって、単に神輿を担ぐ為にお祭りをすると言うわけである。それが紀元前七世紀前後の植民時代になると、次第に変わって来て余程緊張して来るわけであって、つまり植民者は大いなる危険を冒して活動し、人生の浮沈常ならざるを知り来り、人間以上のものに縋りたいと言う要求が自ら湧き出て来たわけで、言わば practical な態度をとって、神の实在の姿を信じて、これを心から祀ると言うことになり、神託によりて神の意志を伺うと言うことになって来た。又従って、お祭りをするということも真面目となった次第である。かかる具合に信仰心が復活して来ると自ずから宗教の客観的方面も変わって来る、それと同時に又 Colonization の結果として東洋流の思想と交渉を持つようになって来た。即ち例えば Olympia の神々を考えると、その人間的なるものが段々と除かれ人間以上のものと考えられることとなり、その神の意志が倫理的に統一されると言うことになって、神は社会の秩序を保つものだと考えられて来た。例えば人を殺すと言う如きことは Homer の時代には寧ろそれは英雄的であり神意に叶うものだと考えられ、賞賛されぬまでも責められなかったのが、Colonization 時代になると、これが神

意に反するものであるのみならず、その者の属する家族、部族さえもが神によって呪われるものだと考えられて来た。つまり全ての神を統一する意志が考えられて来たり、そのため Zeus 神の力が強くなり、それが又倫理的に統一せられて来たわけで、《多神教》から《一神教》に移る傾向を帯び来たったわけである。かくして、段々神の数を少なくして行ったのであるが、全く Zeus に統一せられたのではない、どこまでも多神ではあるがその何れもが Zeus の命を聞くと言うか、 Zeus の意志により神国が保たれると言うことになる。故に Zeus は Schicksal [ 運命 ] の力と一緒に、それによって宇宙の Order を保ち、人間界を支配すると言う風になって来た。この多神教から一神教へ移る経過は後述するユダヤの場合とは大いに異なる。ユダヤでは神々の力の争いの結果行われたのであるが、ギリシャでは各個が一つのものに吸収せられたとでも言うべきである。しかし又 Zeus が人的( personal )ではなくなって、支那の天帝の考えに近づいて来たとも見られる。

これとは別に第二に、解脱を求める要求から地の神 ( Demeter ) の信仰が強くなって来る。しこうして、その中に東洋流の考え方が窺われる。悪事をすれば罪を受けると言う考えと相並んで、それが又自己の属する団体にも及ぶと考えたのであるが、紀元前七世紀頃になると自己意識が発達し、自分の責任と言う考えが起こって、自分が悪いことをすれば死後にも罰を受けると言う風に考えられ、ここに地神の信仰が起こる。つまり死後の世界を考えるとところから解脱の慾望が出て来る。Homer にも Hero が神により死後天国へ連れて行かれると言うことが見えているが、我々凡人でも神を信ずれば天国に連れて行って貰えるのではないかと言う考えが出て来、 Colonization の頃に盛んに Demeter の祭、又その娘なる Persephone ( 地獄の神 ) その側にある Dionysos 神の祭り等が行われることになった。地獄神が Demeter の娘 Persephone を地獄に奪い行き、その女王とするが、それを Demeter が連れ戻したとの Mythologie より出ているのであって、当時のギリシャ人はこれを人里離れた所に於いて芝居として実演すると言うことになった。この芝居の後にお祭りが始まる。即ち善男善女が毛皮に身を包み、団体を作って酒を飲み、終には全く ecstasy の状態となり、Demeter に献げた獣を生そのまま食うと、そこに於いてか神の本質が我々の中に入り来たり、永世に入り得ると言う考えになるわけである。言うまでもなくこれは ecstasy の状態に於いて人間と動物と神とが同体より出ずると言う信仰に基づくものであって、この点 Olympia の神の国の作り方とは大分その性質を異にする。Olympia では人と神とは対立するのであって、人と動物と神とが同体なりと言うが如き考えは存しない。Olympia の神は言わば昼の神であり、plastic な神である。これに反し Demeter や Dionysos の祭りは全く感情中心の宗教であり、目を以て神を見るという如きものではなくして ecstasy の状態の中に自分が神と区別されなくなることになる。従って神と言うよりも、寧ろ神質乃至神性 ( Gottheit ) とも言うべきものと同体になると言う如きものである。

一方 Olympia の神々には宇宙を包含する秩序ある世界が出来るが、他方に於いてはその本質を同じうするの故に一つの世界が出来ると言う二つの全く別の方面より来る Universalismus [ 綜合主義 ] が出来来るわけである。

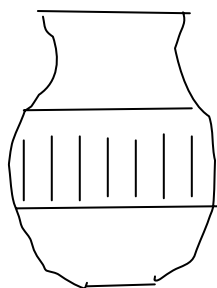
Demeter の祭りと言うのは全く農業より来るところであって、Persephone の伝説の如きも農業に際し一度地下に蒔かれし種子が再び芽をふくと言う再生の思想の起因するものであり、かかることは農業国に常に見るところである。Homer の時代には、既にかかる



primitive な状態を過ぎているのであるが、ペルシヤや Mesopotamia[メソポタミヤ]等にはこの農業神の信仰がまだ続いていたのであって、これが Colonization によってギリシャに入ったたものである。

兎に角この Dionysos-Kult[ディオニソス文化]には primitive な Element が入っているのであって、この東洋より入った Demeter の信仰が小アジアに於けるよりも寧ろギリシャ本国の方で盛んとなった。尤も当時の事情は本国の方が却って文化進まず農業国であったのである。しこうして、これと同じ系統を引いたものが小アジアの方ではそれが土台となって、後の自然哲学を産み出したものと思う。

先ず本国について言うと、Hesiod が初めて Theogonie (神代[統]記)を著わし、それによって神と神との間の順序をつけ、宇宙を体系づけたのであったが、彼の父は小アジアの Colonization に関係深き人であって、Hesiod 自身も後に小アジアより本国に帰り農業を営んだ人である。言わば洋行帰りの村夫子と言うべき形の人であった。彼はその Theogonie に於いて神国が渾沌たる Chaos から段々と“愛”により結びつき、他方では憎悪の情により反撥する、そこより Chaos が differenzieren [分化]して行き今日の如きに至った道行を説いているのである。宇宙間の世界秩序、人間界の社会秩序を神を通じて説明した。ここに於いてギリシャに初めて経過の間に秩序の生成を説明せるものが出たわけである。Homer の如くに plastic ではなく、時間の考えを入れた説明である。つまり、同じく神の国の秩序ではあるが、Hesiod に於いては兎に角時間的に引延ばした世界を作り上げたわけである、要するに時間の観念が入っている。しかるに、これをよく見るとそれは時の経過に於いて説明しながら、しかも尚それが空間的に並んでいることが解る。時間では考えるが、それは押しつぶされたる空間的な考え方の時間である。我々が歴史を時間的に考えると同時に他方これを地理的に見んとするやり方である。



丁度それはギリシャの壺の表面に描かれた繪をみる如くであって、あの繪は個々のものを見てみると plastic であるが、それが又、時の“感じ”を symmetrical に出していると言う感じである。つまり、個々のものが plastic でそれを多数に並べてそれが動いていることを表わす。従って時間の感じを出す、同時にその動きが空間的に見られると言う如き傾きであって、時間が入って来ながら、その時間を空間的に説明する感がある。時間的に観んとしながら、“目の人”である為にどこまでも空間的である。

ギリシャの文化の比較的遅れていた地方にあっては Hesiod の Theogonie となり、紀元前六世紀の半ばには Orpheus[オルフェ]なる人出て、やはり宇宙発展の Theogonie をなし、Orpheus 教と称せらるるものが出来上がったわけである。

Orpheus 教と言うは、自分の力の弱きを感じ、神に頼って強くなり、それによって全てを支配せんとするものであって、その動機に於いてはユダヤと同じであるが、自分を助ける神が自分の外にあるのではなく“自分の内”にある、つまり神は宇宙全体を支配するものであるから、自分も神の中に在ると言う考え方である。同じ宇宙全体が全てのものに行互って色々その形を変えることを信ずるものである。しこうして、Mythologie を自分の慾望に添うように作って行くのであって、Hesiod と異なって自己の慾望より出ているのである。しかし何れにしても全体を包含する Makrokosmos と自分自身なる Mikrokosmos

とが同じものだと言う考えがこの Orpheus 教に於いて表われ来ったのであって、この場合には ecstasy の状態に入り神・人・動物同体となると言う如き事は問題になっていない。

何れにしても Orpheus 教の時代(紀元前六世紀)になって初めていまの Apollo の時代、つまり Olympia の祭りと Demeter の祭りとが一緒になり、Orpheus 教では神と人と同じであると言うことになり、Olympus の神を作ったと同様に明らかなる“神像”を作り得たのであって、これが即ち Dionysos 的なものと Apollo 的なものとが Nietzsche の言う如く一緒になりギリシャ文化を作り上げたわけである。

小アジアの Colonization の地方では多少これとは異なった発展をなしている。Colonization の時代には人心が緊張している時代でもあり、又 Mikrokosmos と Makrokosmos とが同じであると言う Mystik [神秘論]が入っているので、英雄出ずればそれが宇宙の本体を代表するものであると言う考えが出て来るわけであり、それが Tyrant [僭主]が出で来たり、又予言者がこの地方に出て来た所以である。自分の看破せるは社会、宇宙の本質なるを以て、これに従えと言う自分に対する信仰が出て来たわけで、この傾向は事件の多かった小アジアに強い。前に述べた Solon が国家の本質を看破して国の法律を定めると言う考えが、この土台の上に立っている。しかもギリシャ本国に於ける Orpheus 教の如くに自分が弱きが為に神に縋るのではなくして、自分自身の力が大となって征服すると言うのである。即ち本国では未だ objektiv な考えが残っているに反し、小アジアでは自己の力によって宇宙の本体を看破せんとする subjektiv な傾向があるのであって、これが小アジアに於ける自然哲学発生の所以である。

自然哲学は自己の力で宇宙の秩序を知ることによって世界を支配すると言う考えより起こったものである。この考えは K.Joel が近頃その著“Ursprung der Naturphilosophie” [自然哲学の発生] に於いて述べた所にして、つまり Demeter 信仰の Mystik から Naturphilosophie が出たと見ているのである。

自然哲学の始祖 Thales [ターレス]は小アジアの Miletos の Citizen であるが、この町は港であって植民には関係深かった所であり、東洋との交通の中心であったが、Thales がこの地に生まれた紀元前六世紀の頃(Thales は 624-548)は、遠く支那には孔子・孟子出で、インドでは又釈迦が出で、ペルシヤに[ゾロアスター(Zoroaster)]、ユダヤではアモスその他の予言者に次いで間もなく、エレミヤ出でたる時代であって、東洋の諸国ではかくして世界統一を企てる大偉人が相応じて現れた時代であった。殊に、ペルシヤがその世界支配を企てていた頃であり、更には小アジアに Tyrant が発生した頃であった。

Thales はかかる傾向よりして Miletos を中心とするギリシャ諸邦の連合を作り大敵ペルシヤに対せんと企てた政治家であったが、これがギリシャ本来の小国分立に妨げられて実現するあたわず、終に彼はその方向を転じ、エジプトよりの数学・地理学、バビロンよりの天文学を学ぶことによって内面的に、精神的に世界を統一せんとしたのであった。殊に Miletos の地は港であり、彼の見えるものは常に“水”であった。Aristoteles の言うところによれば、Thales は全てのものが湿気を帯びているが故に全てのものの根源が“水”であるとなし、又我々の生活に於ける有為転変と時間の流れあるところより、これによっても、水こそ宇宙の本体であると見たのであって、言わば水を以て我々の生活の Symbol、宇宙の Symbol なりと観じ、我々に対立するものではなくして、内側から内面的に観たの

であって、そのため「水である」ではなくして、寧ろ「水から成る」と言う *Werden* [生成] の考えであり、しかも元来“目の国民”であると言う所から、その *Symbol* として水を選んだと言うわけである。全ての宇宙は *Werden* であり、それを具体的に目で見んとし、それを「水なり」と観じたものだと言える。その後或いは“火”を以て宇宙の本質なりと説く者等が出たが、結局最後に、自然哲学は“*Alles fließt*” [万物は流転する] という語に落ち着く点を見出した。

かく考え来たれば、小アジアの自然哲学はその起る所は、東洋的傾向ある狂信的宗教 *Dionysos* 的なものを経た後に、自分に対する信仰が強かったがために起こったわけであり、自分に対する信仰が弱かった紀元前六世紀のギリシャ本国に於いては *Orpheus* 教となつたものであるが、その後時代を経過するに従い本国でも自分への信仰が段々強くなって来て、そこへ自然哲学が入り込み、*Solon* 等も出たのであった。しこうして、更に後には *Sophist* [ソフィスト] が出ることにもなったのであるが、*Epigonen* [継承者] になると *Thales* の言う点もその真実の意味が受け入れられざることとなつたわけである。

(第三回 終) 2001.1.18 W.P end 中路

#### 第四回． 昭和九年二月二日

今までお話した所から愈々ギリシャの団体生活をその国民性に引っかけて考えることをやってみるつもりであるが、ギリシャ人の国民性を考える場合にそれに最も似た個人たる Goethe [ゲーテ] の Type を観た方がよいと考えている。Goethe は Dichter [文学者] たると同時に哲学者であり、絵も描くし自然科学もやる。全ての方面に発達した珍しき天才であった。我々はその Interest の広いのに驚かされるのであるが、これ等諸方面の Interest が全て Goethe という不可分の人格の中に統一せられていてそこに何らの矛盾がない。

Eckermann との会話の中に、彼は自分は Weimar [ワイマール] の舞台装置に関係して多くの時間をとられた、あの時間を他の仕事に使ったならば多くの仕事をなし得たであろうと思われるかも知れないが、しかし自分はそれを別に後悔していない。自分は何をしてもそれは自分の“表われ”自分の発露なりと考えているからだ、と言う風なことを述べている。Goethe がかく考え得たる所以はその人格が大であり、外界から来る全ての刺激を自分の中に同化し、これを取入れられたのである。従ってそれは刺激によって動かされるのではなく、内部からそれに動くと言うことを自覚したものであると思う。この傾向は既に Leipzig の学生時代から意識されていたものらしく、かの“Dichtung und Wahrheit” [詩と真実] の中にもそれを述べている。即ち外界からの刺激を絵にするか、詩にするか、つまり何か明白なものによって自分のものとしなければ承知しないのであって、この傾向は一生を通じて表れていると言うことを述べている。これは又伊太利 [イタリー] 旅行中に書いた手紙の中にも出ているのであって、自分が今ローマを彷徨しているが、色々の刺激が自分に迫り、その何れかが自分を動かすかに見えるが、しかし、全ての刺激が全部自分の心理状態の中に適当に配列せられその中に調和が得られると考える事を記している。従って彼には外界の刺激は全て自分の Symbol であり、不変の Symbol なりと見得たのであると思う。

故に、かかる傾向の人は外界の事物を自分の体験から考え得るわけである。自分の周囲にある森羅万象は残らず自然とか Nicht-Ich [自分でないもの] とかの本体として観られるわけである。

かかる心理的傾向をギリシャ人に移して考えると、それが根底から verstehen [理解] し得る如く思われる。ギリシャ人は自分を各個の事物の中に感得すると同じ様に、多数の Citizen が別々に行動しているその行動の間に調和あるところより、その個々の Citizen の中に City という実体を考え得たのであると思う。であるからして国家の行動も、やはり各個の Citizen の行動に即して考えられなければならぬ訳であるからしてギリシャの Democratie の本質、即ち各 Citizen が国務に参加すると言うことになるわけである。各 Citizen が行動すると言うことの中に調和が得られるのであるから、ここに初めて、国家が考えられるのである。エジプトその他の如く個人が君主に屈服してその命を行うと言う如きでは国家が成立しない。丁度エジプトの Pyramid [ピラミッド] を見た時にその各個の石が Pyramid という全体にすっかり吸収せられて、その個性を出さないのに反して、ギリシャの Temple は個々のものがそれ自身として美なるばかりでなく、また全体としても調和美を出す所以である。

かく国家を考える時にその各個人間の Proportion を得ている関係だけ Citizen の行